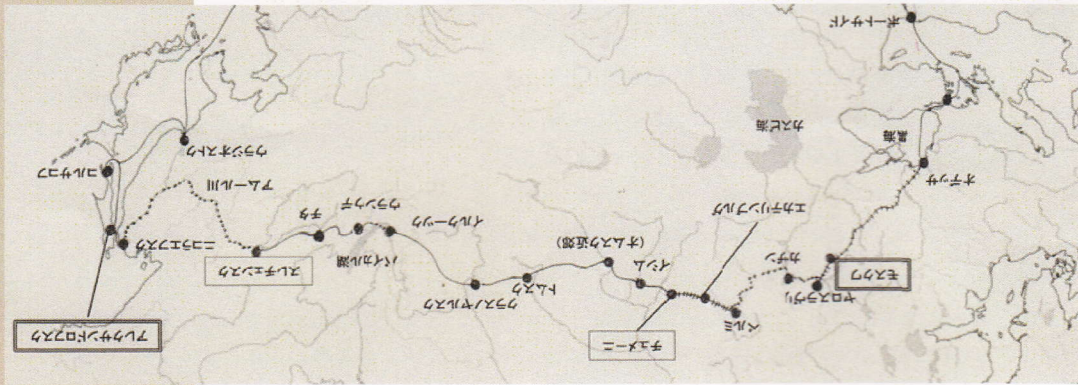


文学を呼び覚ます場所

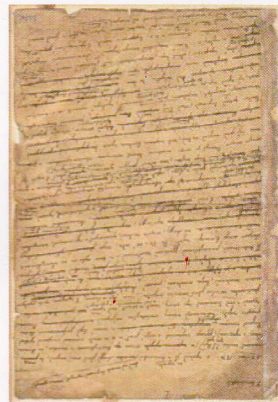
- ① 小島秀雄「飛鳥」1935(昭和10)年 当館蔵
 - ② E.A.ニコニコフA.C.ニコラフ共著「20-21世紀日本文学におけるサハリン島」1916年 当館蔵
 - ③ 北原白秋「ソラリス」1928(昭和3)年 当館蔵
- ※小島は、幼少期に家族とともに樺太に渡り、農夫や伐木夫など様々な仕事に従事した。本書には、樺太時代の経験が多く盛り込まれている。
- ※E.A.ニコニコフ・A.C.ニコラフ共著「20-21世紀日本文学におけるサハリン島」は、日本文学の研究書。当館蔵
- ※サハリン国立大学教授などによる日本文学の研究書。当館蔵
- ※北原白秋「ソラリス」は、二週間に渡る汽船旅行の体験をもとにした旅行記。詩文や人々の会話を採り込みながら、辺境への新鮮な高感感が読み込まれている。



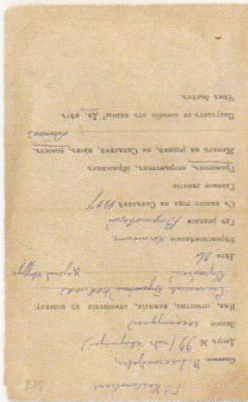
何が彼を駆り立てたのか？ 1万件の住民調査の情熱とは？



※地図には1890年4月21日のモスクワから7月11日サハリン島に上陸するまでの道りを図示した。



【サハリン島】の手書き原稿(複製) ※冒頭の書き出し部分。

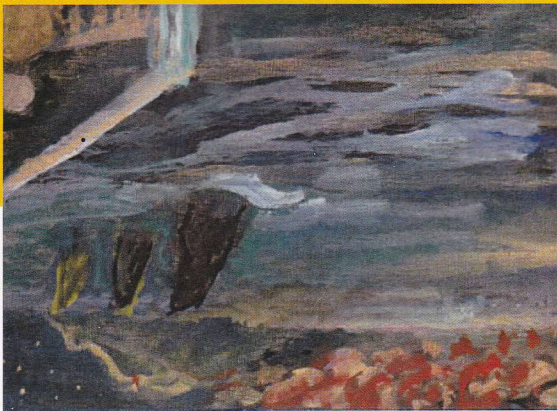


【サハリン島】による住民調査カード(複製)

- ◎住民調査カードに記載されていた13項目
- ・政府の戸籍簿による家庭番号
 - ・身分 ※「労務囚」「入植囚」「元刑囚」「農民」
 - ・氏名(名前、父称、姓)
 - ・年齢
 - ・宗教
 - ・出生地
 - ・何年からサハリンにいるか
 - ・主な職業
 - ・教育程度(読み書きができるか、読み書きができないか、教育を受けているか)
 - ・婚姻関係(既婚、死別、未婚、既婚の場合はさらに出身地で結婚したか、あるいはサハリンで結婚したか)
 - ・国庫からの生活扶助の有無
 - ・病気

7月10日、夜9時。
バカール号投錨。
カッター船が荷揚げの囚人達の
はしけぶねを曳いて来るころ。
埠頭は山火事の煙で見えず。
岬の灯台のあたり。
その下に三兄弟の岩。

(挿画作者のメモ)



工藤正廣 画(サハリン島 チェーホフの上陸前後)2017年

息づく美術家たち



L.ワゼリヤ(タハの歌)



S.ワゼリヤ(シエラと岬) ※コルサコフの海に面している。

- 1892年(32歳) モスクワ近郊のメリホヴォ(現・モスクワ州チェーホフ市区)に家を購入、移り住む。
- 1893年(33歳) 10月「ソラリス」思慕「謎」に「サハリン島」の連載開始(～翌7月)。
- 1895年(35歳) 「かもめ」を執筆。「サハリン島」発刊。
- 1899年(39歳) ヤムタに別荘を新築、母と移り住む。
- 1900年(40歳) トムストらとともに、学士院名譽会員に選ばれる。
- 1901年(41歳) 女優オリガ・クニツェムと結婚。
- 1903年(43歳) 戯曲「桜の園」完成。
- 1904年(44歳) 7月2日結核のため南ドバイのパーチンコフラーに軽地療養、同地で死去。
- ワザの修道院墓地に埋葬される。

- 1860年(0歳) 1月17日南ソラの港町タカローラに生まれる。食品雑貨商を営む家に生まれ五男二女の三番目として育つ。父方の先祖は北口シツの慶應の血統にあつたが、父が事業に失敗し少年期から家族の大黒柱となった。
- 1879年(19歳) モスクワ大学医学部に入學。
- 1880年(20歳) 学業のかたわら短編「隣」の学友への手紙を雑誌に連載、作家デビュー。ペンネームで執筆活動を続けながら家計を支えた。
- 1884年(24歳) モスクワ大学医学部卒業、医師開業。
- 1885年(25歳) ベトナムを訪れ、文壇から大歓迎を受ける。
- 1888年(28歳) 帝国アカデミーの一等賞を最年少受賞。
- 1889年(29歳) 次兄ニコラが結核で死去。
- 1890年(30歳) 4月21日モスクワからサハリン島経由でサハリン島への旅に出発。
- シベリア鉄道もない時代、列車や汽船、馬車を乗り継ぎながら2ヶ月と20日で移動した。なかでも、西シベリアのチュムエーから東シベリアのヌチエンヌに至る4千5百キロの馬車行は、雪解け時期の川の氾濫や悪路に加え、たびたび起こる馬車の故障、時には馬車同士の衝突事故にも見舞われながら、食事もままならない過酷な行程となった。
- 7月11日早朝サハリン島アソフプロフスク港に上陸、その後、島内を移動しながら流刑囚の住民調査で10,000枚を超え調査カードを作成。
- その間3ヶ月、流刑囚の悲惨な収監状況や苦刑も目の当たりにした。10月13日南サハリン島を巡り、ヌチエンヌ河経由で12月8日モスクワに帰還した。

チェーホフの略年譜